

固有名詞の「自称」と「他称」：台湾語の
呼称問題を中心に

内山, 政春 / UTIYAMA, Masaharu

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Intercultural Communication / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

207

(終了ページ / End Page)

232

(発行年 / Year)

2022-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025976>

〔論文〕

固有名詞の「自称」と「他称」

—台湾語^[1]の呼称問題を中心に—^[2]

内山 政春

UTIYAMA Masaharu

1. はじめに

2018年度、在外研究の機会を得た筆者は台湾台南市に1年間滞在し、国立成功大学華語^[3]中心にて中国語と台湾語を学ぶ一方、同大学文学部台湾文学科に客員として所属しつついくつかの学部科目を聴講する機会にも恵まれた。滞在の主目的は多言語国家としての台湾の現状を観察することであり、さいわい大学内外の台湾土着言語振興運動に携わる人たちと知り合うことができた。

朝鮮語学^[4]を専攻する筆者はかつて拙稿（2004, 2012）において朝鮮語の呼称問題について論じたことがある。筆者が朝鮮語に関心をもちはじめたのは1981年、高校1年生のときであったが、当時日本語では朝鮮半島の言語を「朝鮮語」と呼ぶのがふつうであった^[5]。ちょうどその年、NHK「朝鮮語講座」が翌1982年度から開講されることが決まり筆者も大いに期待したが、「朝鮮語」という呼称に韓国が反発し、韓国のKBS（NHKに似た公共放送局）社長がNHKに乗り込んで直談判をするなどの圧力をかけ、放送は暗礁に乗り上げてしまった^[6]。講座はあらためて1984年度「アンニョンハシムニカ～ハンゲル講座～」^[7]の名で開始されたが、2008年度に番組名から「アンニョンハシムニカ」が消え、当初サブタイトルであった「ハンゲル」のみ

が生き残った。NHKが「大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国等で使われている言葉を書き表す文字の名称」を「便宜上、言葉の名称としても使う」^[8] ことになった影響は大きく、大学や高校の科目名にも「ハングル」が用いられるようになってきている^[9]。

さらに大きな影響は、「韓国の言語」＝「韓国語」、「北朝鮮の言語」＝「朝鮮語」であるかのような誤解が広まり^[10]、マスコミのみならず一部の研究者（！）までもがそれに追随していることであり、はなはだしくは「朝鮮」を英語の「ジャップ」と同列にとらえ差別語とする論説さえ現れた^[11]。専門書などを除き、「朝鮮語」をタイトルに用いる一般の教科書は、旧版の改訂版などを除けば拙著（2008）が今のところ最後のようである。圧倒的に多いのは「韓国語」で、他に「韓国朝鮮語」「 코리아語」「ハングル」などの呼称が用いられている。

筆者は今回の滞在で台湾語にも呼称問題が存在することを知った。今回の滞在以前から筆者には多少の台湾語学習経験があり、台湾で発行された台湾語関連書籍も入手していたので、多様な名称が用いられていることを知らなかったわけではない。手元にある中国語あるいは台湾語で書かれた台湾語関連書籍のタイトルには「台語」「台文」「台湾話」「閩南語」「閩南話」「河洛語」「河洛話」「台湾閩南語」「台湾閩南話」「河洛閩南語」「台湾福建話」^[12] などがある。台湾滞在中、台湾教育部が「閩南語」の呼称を強要している、台湾語は「台語」と呼ばれるべきであるという主張を聞く一方で、多言語国家としての公平性の面からは「台語」よりも「閩南語」の方がふさわしいという主張も目にした。これらの主張には政治的な思惑が深く関わっていることも知るようになった。

本稿の目的は、多くの台湾語振興運動家が主張する「閩南語」不当性と「台語」正当性の主張を、筆者がかかわってきた朝鮮語の呼称問題とも関連させて論じ、その妥当性をさぐるところにある。

なお台湾の言語で台湾語をどう呼ぶかは台湾の国内問題であり、

外国人である筆者は意見を述べるにとどまる。また本稿では台湾で「台語」あるいは「閩南語」などと呼ばれる言語を便宜上台湾語と呼ぶが、筆者が日本語でこの言語をこう呼ぶべきだと主張するものでは決してない。

2. 「台語」正当性と「閩南語」不当性の主張

「台語」正当性と「閩南語」不当性の理論的支柱となっているのは管見によれば国立成功大学文学部台湾文学科で現在学科長をつとめる蔣為文氏の論考である。氏はひとかたならぬ熱意をもって台湾土着言語振興運動に尽力しており、しかも母語ではない客家語の運用能力ももつなど、その姿勢と行動力には心より敬服するが、台湾語の呼称問題に関しては筆者は氏と意見を異にする。ただしそれが氏の活動や台湾土着言語振興運動そのものに対する敬意を減ずるものではないことはいうまでもない。

本稿で検討の対象とする氏の論考は以下の[A][B]である（団体名義による論考で氏によって書かれたと思われるものが他にもある）。

[A] 蔣為文「台語不是閩南語也不是福佬語」『喙講台語・手寫台文：台語文的台灣文學講座』（亞細亞國際傳播社，2014）

[B] Wi-vun Taiffalo CHIUNG 「Taiwanese or Southern Min? On the Controversy of Ethnolinguistic Names in Taiwan」『台語研究』7-1（國立成功大學台灣語文測驗中心、亞細亞國際傳播社、華藝數位，2015）

ここでは[A]が主張する「台語」正当性と「閩南語」を列挙する。[B]に第6項目が含まれないこと以外は両者の趣旨はほぼ同じである。

第一，台語是專有名詞，非「台灣的語言」的簡稱。如果照幾位委員的邏輯：使用「台語」一詞，會把「客語」及「原住民族語言」排

斥在台灣的語言之外。那麼，「台灣大學」應該首先被要求改名！因為台灣有約一百六十所大學，憑甚麼只有「台灣大學」稱為「台灣大學」？原住民族「賽德克族」及「達悟族」等也都要被迫改名，因為「賽德克」及「達悟」在其族語裡原意都是「人」的意思。難道只有賽德克族及達悟族才是人嗎？

【第一に、台語は固有名詞であり「台湾の言語」の略称ではない。委員数名^[13]の論理は「台語」という単語を用いるのは「客家語」や「原住民族言語」を台湾の言語から排除することになるということだが、それならまず「台湾大学」^[14]が改名を要求されなくてはならない！台湾にはおよそ160校の大学があるが、何を根拠に「台湾大学」のみが「台湾大学」と称するのか？原住民族^[15]「セデック族」および「タオ族」なども改名を迫られることになる。「セデック」や「タオ」はこれらの言語での本来の意味は「人」の意味だからである。まさかセデック族やタオ族だけが人だということではあるまい。】

第二，台語一詞是歷歷數百年來社會自然形成的慣用語。連戰的阿公連橫於一九三三年完成的台語專書《台灣語典》也使用台語一詞。外來政權中華民國「台灣省國語推行委員會」於一九五五年出版的《台語方音符號》，及國防部於一九五八年出版《注音台語會話》（封面上還有蔣中正的題字），都接受使用台語一詞。直至約一九六〇年代以後，中國國民黨為了加強將台灣人同化為中國人，乃採取「去台灣化」政策，全面將台語硬改為閩南語！

【台語という単語ははっきり数百年にわたり社会において自然に作られてきた慣用語である。連戦^[16]の祖父連橫が1933年に完成させた台湾語専門書『台湾語典』でも台語の名を用いている。外来政権たる中華民國「台湾省国語推進委員会」^[17]が1955年に出版した『台語方音符号』^[18]や国防部が1958年に出版した『注音台語会話』（表紙に蒋介石の題字もあり）も台語の名の使用を受け入れている。およそ

1960年代以後，中国国民党が台湾人の中国人への同化を強めるため「脱台湾化」政策をとるにいたり全面的に台語を強引に閩南語に改めたのである！】

第三，福建閩南地區也有客語使用者。這些委員認為台灣有客語及原住民族語使用者，所以「台語」不能獨佔「台語」。照他們的邏輯，中國福建閩南地區也有少數客家人居住地區，譬如詔安及南靖等地。為了不排斥客家人，也不應該使用閩南語一詞才對！

【第三に，福建省閩南地方にも客家語話者はいる。これら委員は台湾には客家語や原住民族語話者もいるので「台語」が「台語」を独占することはできないとする。彼らの論理によれば福建省閩南地方にも詔安や南靖など少数の客家人居住地域がある。客家人を排除しないためには閩南語という単語を使ってはならない！】

第四，廣東也有閩南語的分布。所謂的閩南語，其分布地點不只在福建南部，也包含在廣東，特別是廣東東部潮汕及海陸豐地區。照這些委員的邏輯，使用閩南語一詞等同把廣東地區的閩南語排斥在外。這讓廣東地區的閩南語使用者情何以堪呢？

【第四に，閩南語は広東省にも分布する。いわゆる閩南語の分布地は福建省南部以外に広東省，特に広東省東部の潮汕や汕尾地方を含む。これらの委員の論理に照らせば閩南語の名の使用は広東省の閩南語を排除することになる。これが広東省の閩南語話者に耐えられるだろうか？】

第五，「閩」字具侮辱、貶抑之意。根據東漢「許慎」《說文解字》及清代「段玉裁」《說文解字注》之解說，閩南語的「閩」字是蛇種、野蠻民族的意思，具有對閩南地區的先住民及其後代歧視的意涵。聯合國於一九四八年公布《世界人權宣言》宣示人人生而平等，不應受

任何歧视。這些委員如果認同種族平等，就不應該強迫他人使用具有侮辱性質的族名。

【第五に、「閩」の字は侮辱や非難の意味をもつ。東漢の許慎による『説文解字』および清の段玉裁による『説文解字注』の解説によれば、閩南語の「閩」の字はヘビのたぐい、野蛮民族の意味であり、閩南地方にかつて住んでいた人々とその末裔に対する差別の意味を含んでいる。国連は1948年に「世界人権宣言」を公布し、人は生まれながらにして平等であり、いかなる差別も受けないと謳っている。これらの委員がもし民族平等に同意するのであれば他人への侮辱を意味する民族名を使用することを強要してはならない。】

第六、河洛語或福佬語不具臺灣代表性。河洛語或福佬語均源自 Hoklo 一詞。依據美國傳教士 S. Wells Williams 於一八七四年出版《漢英韻府》及 Kennelly 於一九〇八年編譯的《中國坤輿詳誌》記載，Hoklo 一詞為廣東本地人對廣東東部潮汕地區的人的稱呼。Hoklo 後來被寫成「學老」，「福佬」，「和洛」或「福佬」等不同漢字。此外，依據台灣總督府於一九三一年出版的《台日大辭典》，所謂 Hô-lô (福佬) 是指廣東人對福建人的歧视稱呼。不論 Hoklo 被寫成何字，該詞都不應該用來稱呼台灣人的母語。

【第六に、河洛語あるいは福佬語^[19]は台湾を示していない。河洛語あるいは福佬語はいずれも Hoklo という名から来ている。米國宣教師 S. Wells Williams が1874年に出版した『漢英韻府』と Kennelly が1908年に編訳した『中国坤輿詳誌』の記述によれば、Hoklo とは広東省人が広東省東部の潮汕地方の人々を呼ぶ名であった。Hoklo は後に「學老」「福佬」「和洛」「福佬」など異なる漢字で書かれるようになった。そのほか、台湾總督府が1931年に出版した『台日大辭典』によれば、いわゆる Hô-lô (福佬) は広東人の福建人に対する蔑称である。Hoklo をどう書こうが、この単語は台湾人の母語を呼ぶのに用

いるべきではない。】

第七，現實上，台語族群沒人公開主張客語及原住民族語不屬於台灣的語言。以當事者國立台灣文學館為例，被指控具排他性的「台灣本土母語文學常設展」內容已包含客語文學、原住民族語文學及台語文學。只因使用台語文學一詞就被指控具排他性，實不合情理。

【第七に，現實に，台語族群^[20]で客家語や原住民言語が台湾の言語ではないと公開の場で主張した者はいない。当事者として国立台湾文学館の例を挙げると，排他的であると非難された「台湾本土母語文学常設展」の内容にはすでに客家語文学や原住民語文学，台語文学が含まれている。ただ台語文学の名を用いただけで排他的であるというのはまったくクツに合わない。】

第八，一九九六年公布的《世界語言權宣言》第三十一及三十三條分別指出，「所有語言社群均有權在所有範疇與所有場合中保存並使用其合宜的姓名系統」，「所有語言社群都有權以自己的語言稱呼自己」。台語一詞是大多數台灣人的習慣稱呼，應該予以尊重。

【第八に，1996年に公布された「世界言語権宣言」第31条および第33条にはそれぞれ「すべての言語共同体は，すべての場面およびすべての機会において，固有名称に関するすべての体系を保持し使用する権利を有する」，「すべての言語共同体は，自らの言語において使用される名称により自らを称する権利を有する。他の言語へのいかなる翻訳も，曖昧または軽蔑的な呼称となる翻訳は避けなければならない」^[21]としている。台語という名は大多数の台湾人の習慣的な呼称であり，尊重されなければならない。】

以上の主張に対して，次章以降において筆者の考えを述べたい。

3. 「閩南語」を擁護する

筆者はかつて拙稿（2004）において、「朝鮮語」も「韓国語」も正当な名称であり、「朝鮮語」不当説、「韓国語」不当説にはいずれも理がなく、ただしいくつかの理由から筆者は「朝鮮語」を用いると述べた。

台湾語の呼称問題に対する筆者の考えも基本的には同じである。すなわち「台語」も「閩南語」も正当な名称であり、「台語」不当説、「閩南語」不当説にはいずれも妥当性がないと考える。その意味で、前章でみた蔣為文氏の「閩南語」不当説には同意できない。本章では、それを具体的にみていくことにしたい。

前章でみた8つの根拠（以下①～⑧で示す）のうち、①は正当だと筆者は考える。ある国における優勢な言語の名称にその国の名称が用いられるのは一般的な傾向であろう^[22]。またその国の名称が用いられたとしてもその他の言語の存在を否定することにはならない。筆者が本稿の執筆に用いているこの言語を「日本語」と呼ぶことが「アイヌ語」や「琉球語」の存在を否定することにはならないし、ベトナムには「ベトナム語」以外に多くの少数言語が存在する。フランス、ドイツ、ロシアなどヨーロッパ各国も決して単一言語国家ではないが、フランス語、ドイツ語、ロシア語という名称を用いている。すなわち、世界の他の言語名称と比較する際、「台語」の名が多言語国家である台湾の他の言語を排除することにはならず、台湾語を「台語」の名で呼ぶことが不適切だとはいえない。ただし「最良の選択」かどうかは別問題である。

次に、「閩南語」の名称の強要が「脱台湾化」のためだという②に対し筆者は否定する根拠をもたない。当時が学校教育やメディアでの台湾語使用が制限された「中国化」の時代でもあったのは事実である^[23]。

ただ、国民党政権でもかつては「台語」を用いていたという指摘は反論として有効だろうか。すべての台湾語振興運動関係者が「閩南

語」という名称を否定しているわけではない^[24] のだから、同じ論法で「閩南語」でもよいということになる。

「閩南語」を支持する人々には以下の2つの考え方があるだろう。

㉗「台湾は中国の一部である」

㉘「台湾は多民族／多言語／多文化社会である = 台湾語は台湾の言語の一部である」

㉗にも「華人社会の一部」だという文化的な観点と「中台は1つの国家であるべき」だという政治的な観点があり、両者は同じではないが、本稿ではそれには触れない。一方㉘の観点から「閩南語」を用いるという立場もあることを「台語」支持者は理解すべきだと筆者は考える。台湾語は中国語に比べれば「弱者」であるが、客家語や原住民族諸言語に比べれば「強者」であろう。たとえ「台語」が論理的には正当な名称であっても、「弱者」の理解を得てこそ台湾は多言語国家として族群の真の平等を実現しうるのではないだろうか。「閩南語」より「台語」の方が伝統のある名称だとしても、さらにいえばかつて国民党という「仇敵」によって命名された名称だとしても、族群の平等のために「閩南語」を用いる、という選択肢もあると考える^[25]。「閩南語」支持者に対して「国民党」的思考、「中国」的思考の支持者である、というレッテル貼り^[図1]は決して行なってはならない^[26]。

いわゆる独立人士にも「台語」という名に反対する意見があることも述べておきたい。「中華民國」の「台湾國」あるいは「台湾共和國」への改名を主張する高永謀（2005）は、「國語」を「華語」とすべきだとしながら、台湾語だけが「台語」なのではないので「台語」は「福佬語」にあらためるべきだと述べている。

③④は「台語」が地域名と言語分布が一致しないという批判に対しての「閩南語」も同じだという逆批判であるが、①のとおり「台語」

は固有名詞であり「台湾の言語」を指しているのではないので、同じ論理で「閩南語」でもよいことになる。朝鮮語は中国吉林省などにも分布しているが、その話し手が「朝鮮族」であってもその地は決して「朝鮮」ではなく、「ホーロー語」が不適切だという⑥も、米国人やオーストラリア人の大多数が母語として話す「英語」が「英国」とまったく隔絶されていることを考えれば、台湾の言語に福建省の地域名が用いられることはおかしくない。English の名の使用が移民者の先祖の土地の言語に由来する言語を引き続き用いた結果であると考えれば「閩南語」という名称は自然でさえある。

〔図1〕「閩南」名使用を「中国ショービニズム、覇権主義」とするピラ



閩南人=野蠻人=中國南方的野蠻人
使用閩南人、閩南語的稱呼= 支持中國沙文主義與霸權主義

また台湾語が福建省の閩南語とはもはや別言語だという主張もしばしば聞かれる^[27]が、2つの「ことば」が同一言語の方言の関係なのか別言語なのかを示す言語学的指標はなく、地域や国家のような非言語学的視点から決められているというのは言語学の常識に属する^[28]。

⑦は、客家語や原住民言語が台湾の言語ではないというのは事実と反するのだから主張するはずもないだろう。それと「台語」と呼ぶか「閩南語」と呼ぶかは別問題である。

なお「ホーロー語」や「閩南語」が蔑称であるという⑤⑥、また「世界言語権宣言」をめぐる⑧については次章以降で扱いたい。

4. 固有名詞と「蔑称」

「閩南語」の「閩」が蔑称であるかを「証明」することは難しい。しかしこのような古典の解釈を現代に適用するのは合理的だろうか。現代語の意味は語源つまり過去の言語ではなく、現在の言語の使用例から帰納して決定すべきだというのが言語学の教えるところである（日本語の「貴様」を参照）。現在「閩南語」の名称を用いる人々すべてが「閩」に侮蔑のニュアンスを感じているとはいえない。筆者が台湾滞在中に知り合った台湾語振興運動家には蔣為文氏のような考え方が多かったが、華語中心で筆者が学んだ語学教師、また知り合った学生に聞いた範囲では蔑称であるという主張はなかった。台湾語振興運動家にも蔑称ではないという主張があるのは上述のとおりである。つまり蔑称と感ずる人がいることと蔑称と感ぜぬ人がいることのいずれもが事実である。

かりに「閩南」が蔑称であるから用いるべきでないというのであれば「蒙古」も同じであろう。現に日本では「蒙古」ではなく「モンゴル」と書くべきだという主張がある^[29]。台湾語振興運動家が「蒙古」を用いつつ^[30]「閩南語」を拒絶するのは矛盾ではなからうか。

一方、本来蔑称でなくても、文脈の中で侮蔑的な意味合いを帯びるようになったのが日本語の「支那」であろう。筆者は「支那」を文脈を問わずに蔑称だと決めつけるのには賛成しないが、多くの場合否定的な文脈で用いられるのは事実である。そして台湾語振興運動家の中には、やはり否定的な文脈で「支那」を用いる人たちがいる。筆者はこの種の行動には共感を覚えない。

語源を問題にするならば、台湾語の「右」は英語や朝鮮語などと同じく「正しい」と語源を同じくし、「左」は「反対」に由来する^[31]。だからといって現代の台湾語話者が「右」が「正しい」、「左」は「正しくない」と考えているわけではなかろう。台湾語では娘ではなく息子のみを「後生 (hāu-seⁿ)」と呼ぶが、この単語の使用者が「男児だけが子供である」と考えているわけではあるまい。かつての男尊女卑時代の考え方が語源に反映しているとしても、それは現代語のニュアンスとは異なるのである。この種の論理を推し進めていけば、「台湾」はもともと現在の台南地方を指す名称だったのだから、「台湾人」の名を全台湾人に対して用いるべきではないということになってしまう。

台湾語学者王育徳氏は自身の博士論文で「台湾語」と「閩南語」の両者を用いている^[32]。一方、王育徳 (1985a : 268) では「台湾語を閩南語と称するのは、現実にそぐわないし、長い慣用からもはずれている。それに学問的にも正確とはいえない」と述べている。ただし注目すべきは、「台湾語」が適当な名称だとしながらも「閩」が蔑視の意味を含むという主張はないことである。管見によれば王育徳氏には「閩南語」の名を「閩」を理由に批判したことはなく、むしろ「閩」差別語説には批判的であるように見える^[33]。また王育徳 (1982) のカセットテープでは「台湾語は、台湾の現在の総人口 1800 万の 85% を占めるネーティブの台湾人の、そのうちのまた 85% を占める福建系台湾人の母語、マザー・タングであります。広い意味の福建語、一名

閩南語に属します」と述べている。氏に「閩」が侮蔑の意味を持つという認識があればそれに触れなかったとは考えにくい。

台湾が多言語社会であるということはいうまでもなく多民族社会であることを意味する。言語名は「華語、台語、客家語、原住民族語」と言うことができても、族群には「閩南」の名を用いざるをえない。いくら固有名詞でも族群名を「客家人」と並べて「台湾人」と呼ぶのは無理であろう^[34]。同じ台湾文学科の陳麗君(2011)は「閩南人」と「台語」という名称を用いており、このような事実がある以上、「閩南」が「脱台湾化」用語であり「閩」が蔑称であるという認識が台湾語研究者、台湾語振興運動者に共有されているとはいえない。この認識が共有されていないのであれば「閩南語」を用いてはならないという理由は消滅する。

5. 「自称」と「他称」

本稿はここまで台湾語の呼称である「台語」あるいは「閩南語」が何語による名称なのかをあいまいにしたまま議論を進めてきた。つまり「台語」が台湾語 *Tâi-gí* なのか客家語 *Thòi-ngî* なのか中国語 *Táiyǔ* なのか（あるいは日本語「たいご／たいわんご」なのか）、「閩南語」が台湾語 *Bân-lâm-gí* なのか客家語 *Mén-nàm-ngî* なのか中国語 *Mínnányǔ* なのか（あるいは日本語「びんなんご」なのか）である。本来は議論の対象が何語であるのかを明らかにしておかなくてはならない。台湾語、客家語、中国語（もちろん日本語も）という異なる言語同士で、同じ漢字表記が必ずしも同じ意味をあらわすとは言えないからである^[35]。

実は筆者が長年関わってきた朝鮮語の呼称問題においても「何語による名称」なのかを認識せずに議論あるいは主張がなされることが少なくなかった。日朝中3言語で朝鮮語がどのように呼ばれているかをみよう。

日本語名称：伝統的には「ちょうせんご〔朝鮮語〕」。最近は日常用語以外に学術用語でも「かんこくご〔韓国語〕」が用いられることが少なくない。ただしその場合も前述のとおり北朝鮮の変種をさす場合にはマスコミなどで「ちょうせんご〔朝鮮語〕」が用いられる。

朝鮮語名称：韓国では「한국어〔ハングゴ：韓国語〕」、北朝鮮と中国吉林省では「조선어〔チョソノ：朝鮮語〕」。ただし中国では韓国の変種を「한국어〔ハングゴ：韓国語〕」とも呼ぶようである。

中国語名称：台湾では一般的には「Hánwén〔韓文〕」を用いている。中国では伝統的には「Cháoxiānyǔ〔朝鮮語〕」を用いてきたが、最近では韓国の変種に「Hánguóyǔ〔韓国語〕」も用いられる。

つまり「朝鮮」と「韓国」という名称が問題となる。ここで強調しておけば、南北朝鮮はともに朝鮮半島に「1つの言語」が話されていると考えており、日本の研究者にも異論はない。もうひとつ強調すべきは、韓国ではその「1つの言語」を「한국어〔ハングゴ：韓国語〕」、北朝鮮ではその「1つの言語」を「조선어〔チョソノ：朝鮮語〕」と呼んでいるということである^[36]。そして日本では「1つの言語」をあらわすのにもっともふさわしい名称として「ちょうせんご〔朝鮮語〕」を用いてきた。

しかし冒頭でも少し触れたとおり、日本がこの名称を用いることに少なからぬ韓国人が嫌悪感を示してきた。その理由は、①敵対国家の名称であるから、②日本統治時代の名称だから、③日本人による「朝鮮」という呼称は蔑称だからというものである。しかし②と③は「口実」だと考えてよい。そのような名称を朝鮮半島の北部で国家の名称に採用するはずがないではないか（そう考えれば中国が福建省の一地方を閩南などと呼んでいる以上「閩」が蔑称だという主張は受け入れがたい）。

実際の理由は①で、韓国は地名として用いられてきた「朝鮮」を「韓

國」に改めるよう告示を出している^[37]。現在の韓国では「韓国」は朝鮮半島全体を指すのにも用いられ、北朝鮮は「北韓」と呼ばれる。さらに朝鮮半島は「韓半島」、朝鮮史は「韓国史」、朝鮮語は「韓国語」など、英語で Korea / Korean とされるものは基本的にすべて「韓／韓国」と呼ばれる。つまり日本語の「かんこく〔韓国〕」と朝鮮語の「한국〔ハングク：韓国〕」は意味が異なる。まさに「偽りの友」である。朝鮮半島全体をあらわす朝鮮語の「한국〔ハングク：韓国〕」に該当する日本語は「かんこく〔韓国〕」ではなく「ちょうせん〔朝鮮〕」である。

ここで「自称」と「他称」という用語を用いれば、韓国にとり「自称」は「韓国」であり、日本語による「他称」は「朝鮮」ということになる。英語による「他称」は「高麗」に由来する Korea である。「自称」と「他称」が異なるのは異なる言語間では当然ありうることである。韓国が「自称」として「朝鮮」を捨ててもっぱら「韓／韓国」を用いるのはもちろん韓国の自由である。しかし韓国はそれを誤解（あるいは曲解？）した上で、韓国独立以降生まれた新しい名称であろう「한국어〔ハングゴ：韓国語〕」という朝鮮語の単語を「直訳」した「かんこくご〔韓国語〕」という名称を日本に強要してきた。本稿の冒頭で紹介した NHK 朝鮮語講座の名称に対する韓国の干渉もその一環である。

極論すれば、世界に複数の言語が存在する以上、「自称」と「他称」が完全に一致することはありえない。また「自称」が複数ある朝鮮語（韓国では「韓国語」、北朝鮮では「朝鮮語」）や中国語（いわゆる中国共通語だけでも中国では「漢語」「普通話」、台湾では「國語」「華語」「北京話」など）のような例もあるし、そして上で見たとおり、同じ語源の単語が同じ意味であるとは限らない。それゆえ、結果的にも「他称」をそのまま認めるしかない。

筆者は世界言語権宣言の趣旨には賛成である。第 31 条「すべての言語共同体は、すべての場面およびすべての機会において、固有名称

に関するすべての体系を保持し使用する権利を有する」,そして第33条「すべての言語共同体は,自らの言語において使用される名称により自らを称する権利を有する.他の言語へのいかなる翻訳も,曖昧または軽蔑的な呼称となる翻訳は避けなければならない」にも同意する.なおここで言われている「翻訳」とは「他称」であり,結果的にそれ以外の内容が「自称」を指しているのは明らかである.

これを台湾語に適用してみよう.台湾語母語話者がみずからの言語の「自称」つまり台湾語名称を「Tâi-gí〔台語〕」とすることを望むのならば,それは他言語の話者が干渉すべきことではない.つまり「Bân-lâm-gí〔閩南語〕」という名称を台湾語話者に強要することは決して許されない(ただし「自称」が1つでなければならない理由はない).

しかし「他称」は異なる.「Tâi-gí〔台語〕」と「自称」する言語を他言語の話者が「他称」としてどう呼ぶかは他言語の話者の自由である.中国語話者が「Mǐnnányǔ〔閩南語〕」と呼ぶか「Táiyǔ〔台語〕」と呼ぶかは中国語話者の自由であり,台湾語話者が干渉してはならない.しかも台湾語振興運動家は「中国語は自分たちの言語ではない」と主張しているのではないか^[38].台湾語話者が中国語による「他称」に「Táiyǔ〔台語〕」を要求するのは,韓国の朝鮮語話者が日本語による「他称」に「かんこくご〔韓国語〕」を要求するのと同じく他の言語を尊重しない行為だといわざるをえない.

ここでドイツの例をみよう.ドイツ語の「自称」は Deutsch あるいは die deutsche Sprache であるが,英語による「他称」は German, フランス語による「他称」は Allemand, ロシア語による「他称」は немецкий язык(口の聞けない者のことば!)である.ロシア語の「他称」は語源に照らせば蔑称であろうが,ドイツは語源の異なる「他称」の1つとしてこれも受け入れており,これがソ連/ロシアとのあいだで国際問題になったとは寡聞にして知らない.

台湾語による名称として「Bân-lâm-gí〔閩南語〕」を強要されるのが不当であるという主張はそのとおりである^[39]。しかし、繰り返すが、中国語で台湾語をどう呼ぶかは中国語話者の自由である。台湾語振興運動家の主張は、自身の言語を台湾語で「Bân-lâm-gí〔閩南語〕」ではなく「Tâi-gí〔台語〕」と呼ぶ権利の要求であり、中国語の名称に「Táiyǔ〔台語〕」を用いるべきだという要求ではないと筆者は信じている。

同じく、日本語による名称に何を用いるかは日本語話者が決めることである^[40]。考えてみれば、日本語による名称は日本語の語彙なのだから、「いぬ」や「ねこ」という単語を他言語の話者が替えることができないことと同じで、当然のことなのである。これは言語名のみならず固有名詞全般^[41]、それが漢字表記によるものであればその読み方^[42]にも関わってくる問題である。

各言語による呼び方はたとえば以下のようになろう^[図2]（これ以外の呼称を排除するものではないのはいうまでもない）。

〔図2〕各言語による自称と他称（濃い網掛けの箇所が自称）

～を ～で	日本語	韓国の 朝鮮語	台湾の 中国語	台湾語	英語
日本語	にほんご にっぽんご	ちようせんご かんこくご	ちゅうごくご ペキンご たいわんかご	たいわんご びんなんご ホーローご	えいご イギリスご
韓国の 朝鮮語	일본어 〔日本語〕	한국어 〔韓國語〕	중국어 〔中國語〕	대만어 〔台灣語〕	영어 〔英語〕
台湾の 中国語	Rìwén	Hánwén	Zhōngwén Huáyǔ Běijīnghuà	Mínnányú Táiyǔ Hélúoyǔ	Yīngwén
台湾語	Jit-gí Jit-bún Jit-pún-ōe	Hân-gí Hân-bún Hân-kok-ōe	Tiong-bún Hôa-gí Pak-kia ⁿ -ōe	Tâi-gí Bân-lâm-gí Hô-lô-ōe	Eng-gí Eng-bún
英語	Japanese	Korean	Chinese	Taiwanese Southern Min Hokkien	English

6. おわりに

本稿で検討した「閩南語」不当論に筆者は説得されなかった。閩南語という名称を忌避するのは、中国で用いる名称と同じものを使いたくないという感情的な理由によるもの^[43]で、これを蔑称とするのは後付けのリクツであるというのが私の見解である。よって台湾語振興運動家がしばしば用いる「私たちは蛇ではない」というスローガン^[図1]にはまったく共感を覚えない。

いったい台湾と中国が別個の国家であることを主張する際に両者の言語が異なると主張する必要があるのだろうか。台湾と中国で同じ言語を用いること、その名称が同じであることは、両者が1つの国家であること、1つの国家であるべきことを意味しない。まったく単純なことで、イギリスとアメリカ、ドイツとオーストリア、フランスとスイスなど、言語圏と国家の境界は一致しないのがふつうだからである。「台語」と呼ぼうが「閩南語」と呼ぼうが、台湾が中華人民共和国の領土でないという事実は変わらないのである。米国人が英国の言語を用いその言語を English と称することが、英国人と米国人が「两岸一家親」^[44]でもなく米国が英国の「不可分の領土」にもならないのと同じことである。

台湾国内の言語名称については外国人が干渉すべきではないという前提のもとで、台湾の多言語社会に共感し、憧憬すらいだいている一外国人言語研究者として、筆者の抱いている素朴な感想を、敢えて発言させていただいた次第である。

注

- [1] 中国大陸福建省から台湾への漢民族の移住が約400年前に始まって以来、日本による統治が始まるまで主流であった言語。日本統治下では日本語が、中華民国統治下では中国語（いわゆる北京語、中国で普通話と呼ばれるものと基本的には同じだが、英米の英語や南北朝鮮の朝鮮語のように細かい点で違いがある）が国語とされたが、特に台湾南部では現在でも多数の母語人口をもつ。一方特に台北を中心とする台湾北部では中国語の母語人口も少ない。
- [2] 本稿は2019年6月30日に開催された中国語文学会第162回定例学術研究発表会で筆者が行なった報告の発表要旨を大幅に加筆、修正したものである。報告では発表要旨は日本語を、ただし後述の蔣為文氏も出席しておられたので口頭では「ブローケン・タイワニーズ」を用いた。
- [3] 台湾では中国語を「國語」と呼んできたが最近が多言語主義の立場から「華語」と呼ぶことも少なくない。
- [4] おもに朝鮮半島において朝鮮民族の母語として用いられることから、筆者は日本語ではこの言語をこう呼ぶ。筆者は2016年度から4年間、放送大学の客員として朝鮮語を担当する機会を得たが、科目名は「韓国語」としつつ、最初に理由を断った上で、印刷教材（教科書）と放送教材（ラジオ）では一貫して「朝鮮語」の呼称を用いた。
- [5] 現在「朝鮮語」という名称は学術的には一定の地位を保っているが、一般的には「韓国語」がふつうであろう。ただし南北朝鮮が同一言語を用いるという前提であれば南北の言語を同じ名称で呼ぶのが筋である。なお筆者は「韓国語」が「国」の字を含むゆえに国家＝言語という結びつきを示していて不適切だという主張には与しない（拙稿（2004：87-89））。もしそうならば「中国語」も不適切だということになる（そのような主張（田中克彦（1981：14-16）など）もあるが）。
- [6] 『朝日新聞』1982年1月22日夕刊12面。このいきさつは南相璽（1994）に詳しい。
- [7] 「アンニョンハシムニカ」は朝鮮語で「こんにちは、お元気ですか」の意。
- [8] テキスト『テレビでハンゲル講座』に毎号載せられている断り書き。ラジオ入門編『まいにちハンゲル講座』、ラジオ応用編『ステップアップハンゲル講座』でも類似の記述が毎号なされている。
- [9] 関西外国語大学、松山大学、東京都立日比谷高校など。
- [10] 拙著（2008）の改訂版である拙著（2022：15）では「朝鮮語」と「韓国語」

- は2つの異なる言語を指すのではなく、たとえば「スペイン語」と「イスパニア語」のように同一の言語を指す名称が複数存在するというだけのことです。決して『<韓国語>は韓国のことばで、それと区別して北朝鮮のことばのみを<朝鮮語>という』ではありません!!』と説明した(ゴシックは原文どおり)。
- [11] 『朝日新聞』2020年10月6日夕刊7面に掲載された大阪スポーツ部河野光汰記者による署名記事。氏は「言うまでもなく、朝鮮は朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)を指す言葉だ」などと日本語による用法と相入れない主張を行なっている。自社の新聞記事に「朝鮮半島」や「南北朝鮮」「朝鮮統一」などの単語が並んでいるのが目に入らないのだろうか。そもそも「北朝鮮」が朝鮮半島全体が「朝鮮」であることを前提とした呼称であることにも気づくべきであろう。
- [12] ここでは原文の字体(いわゆる繁体字)を用いたが、「臺」は「台」も幅広く用いられるため、便宜上「台」で統一した。なお次章以降、本稿で便宜上用いる台湾語とはことなり原文が「台語」であることを示すため、日本語訳を添えて台語とすることがある。
- [13] ㊦は「台語不是閩南語【台語は閩南語ではない】」のタイトルでその簡略版が『台湾時報』2013年11月27日付に掲載されたとある。委員とは教育および文化委員会に属する台湾の国会議員数名のことで、国立台湾文学館の「台湾本土母語文學常設展」で「台語文學」の名称を用いたことを理由に予算を凍結し、「閩南語」あるいは「河洛語」「福佬語」の名称を用いることを要求したという。
- [14] 台北市にある国立大学。日本統治時代の台北帝国大学の後身。
- [15] 北海道が本来アイヌ民族の居住地だったのと同じく、台湾も本来マレー・ポリネシア系語族の諸言語を話す民族の居住地だった。前述のとおり漢民族の移住は約400年前に始まる。なお本稿では台湾のシナ系言語による用語「原住民」あるいは「原住民族」をそのまま使用する。
- [16] 中国国民党の長老格の政治家。
- [17] 中国国民党政権が台湾を統治する前、台湾で有力なシナ系言語は台湾語、ついで客家語であり、決して中国語(北京語)ではなかった。
- [18] 中国語(北京語)の発音表記のために1918に公布された注音符号を台湾語に適用できるよう拡張したもの。
- [19] 日本語で「ホーロー語」と呼ぶこともある。本稿では次項以下において「河洛」「福佬」などを「ホーロー」と訳す。
- [20] 「族群」とは王甫昌(2014)によれば「『家族』や『地域コミュニティ』よりも大きいながら、民族の規模には至っていない集団」(:21)、また「『民族」

と「族群」には多くの共通する点がある。他方でそれらの間の一番大きな違いは、民族といった場合は通常「政治主権」の概念に関わってくることであり」と述べている（：14）。本稿では「族群」をそのまま使用する。

- [21] この条文の日本語訳は言語権研究会編（1999：176-177）による。
- [22] 田中克彦（1981：11）では「日本語の場合は、国家の名と民族の名と、そこで用いられる言語の名と、これら三つのものが一致している。これは中程度から比較的小規模な国家のばあいにみられるタイプである」と述べている。
- [23] マスメディアに関しては菅野敦志（2003）に詳しい。また王育徳（1985a：268）では当時の状況に触れ、「現在の台湾では「台湾語」は「台湾人」という用語とともに政治的禁句となっている」「台湾語に関する論文著述がことさらに閩南語とか福建語とか称するのは、禁忌に触れまいとする考慮に出る場合が多いのではないか」と述べている。
- [24] 李勤岸、洪惟仁（2007）で洪惟仁氏は「閩南語」は蔑称ではないとしている。
- [25] 適切な比喩かどうかわからないが、加藤栄（1991）は「ベトナムのローマ字はもともと「十九世紀末、ベトナムの植民地化に乗り出したフランスがまず行ったのは、中国とベトナムとの文化的関係を絶つことだった。そのため「奇怪」な文字、漢字を公式文書から排除し、漢字にかわる新しい文字を採用する必要があった」という経緯で採用されたが、その後「もともとは「仇敵」フランス人の作った文字であるクオック・グーが、新たな民族的様相を帯びて、人民政権の側からも積極的に採用されるようになった」と述べている。
- [26] 日本で「朝鮮語」の名の妥当性を主張する研究者に対して「北朝鮮シンパ」であるとか、日本の朝鮮支配を反省していない、などというレッテル貼りを行なう韓国人や日本人がいた（今もいる？）。
- [27] 台湾基督長老教會台湾族群母語推行委員會（2011）では「「台語」不是「閩南語」：現今的「台語」雖有源自中國閩南語的成分，但由於歷史因素而融合平埔語、荷蘭語、西班牙語、日本語等等成分，早已自成一格，與所謂的「閩南語」已不同】【「台語」は「閩南語」ではない：現在の「台語」はその起源こそ中国の閩南語の要素であるが、歴史的要因によって平埔語（筆者注：台湾東部にかつて居住していた原住民の言語。平埔族はすでに漢民族とほぼ同化したとされ、台湾政府が公認する原住民族には含まれない）やオランダ語、スペイン語、日本語などの要素と融合し、すでに独自の特徴を持つに至っており、いわゆる「閩南語」とはすでに異なっている】と述べている。この「台湾語は閩南語ではない」はいわばスローガンのようにさえなっていて（[A](#)の初投稿時のタイトルも前述のとおりこれであった）、筆者がFacebookで「閩南語」と書いたところ、おせっかいにもこ

のスローガン（台湾語では Tâi-gí m̄-sī Bân-lâm-gí）をコメントとして書き込んできた運動家さえあった。

[28] 千野栄一（1989）は「独立の言語なのか方言なのかの区別は、しばしば、政治的、宗教的、地域的、歴史的などの、言語的特徴以外の基準によって行なわれる」、「1つの言語の方言間の差異が、長い期間の離別によって大きくなると、しばしば、それを1つの言語としてとり扱うべきか、2つの方言としてとり扱うべきかの問題がおり、言語研究者によって異なった理解がなされ、その結果、言語の数は1つ異なることになる」と述べている。

[29] 「こちら特報部」『東京新聞』2011年2月23日付4面

[30] 張裕宏（2009：40）では「Bōng-kó'（蒙古）」を見出し語として収録している。

[31] 台湾語は漢字表記がひとつに定まらないものが少なくないが、教育部インターネット辞典では右側は「正𠵼」または「正𠵼」, 左側は「倒𠵼」または「倒𠵼」, ローマ字表記はそれぞれ chiá¹-pêng, tò-pêng である。

[32] 王育徳（1987）に収録されている氏の博士論文は「閩音語研究」であり、論文の中で「台湾語は当然閩南語に属する」と述べている（：19）。

[33] 王育徳氏が高校入学後はじめて「ホーロー語」の名を聞いたというエピソード（王育徳（1985b：16））が文献㉔によって「ホーロー語」の名称が不適切である根拠として引用されている（：76）。しかし王育徳（1985b）では「閩も蛮と同様、中に虫の字がある。蛮のように直接的ではないが軽蔑の意味を覆いかくせない」という某氏の主張を「独断と偏見がゆくりなくもあらわれている」と批判し、「蛮と閩は確かに同系の語であるが（蛮は虫＋音符𠵼（レヌ）。姿や生活が乱れもつれた虫（へび）のような人種。閩は虫と音符門。沿海の原住民は竜蛇の子孫の意味）、南蛮は「東夷、北菝、靖西戎、南蛮」（『礼記』）の文脈でわかるように四夷の一種。一方、閩南は閩北と対立する地名で、上位概念に閩＝福建がある。用法がちがう」と述べている（：19-20）。

[34] 文献㉔の①では「セデック族」「タオ族」、③では「客家人」、⑥では「広東人」の名称を用いながら、⑦では「台語族群」と呼ぶのは「閩南」の名を使えないためにアンバランスが生じてしまったものだろう（NHKのラジオ語学講座番組名が「まいにちドイツ語」のように「まいにち～語」で構成されているのに朝鮮語のみ「まいにちハングル講座」となっているのを思い起こさせる）。また文献㉔では族群としての閩南人を Tâi-oân-lâng, 客家人を Thòi-vân-ngìn と呼んでいるが（：56）、これはそれぞれ台湾語と客家語で「台湾人」を指す名称であり、特定の族群を示す名称ではない。よってこの用法は不適切である。

[35] 単語の形態そのものは同一語源でありながら言語によって意味のずれが見ら

れることを言語学では「偽りの友」と呼ぶ。日本語、朝鮮語の「汽車」が中国語、台湾語では「自動車」の意味であったり、日本語の「昨日」が台湾語では「おとつい」の意味であったりするのがその例である。ヨーロッパ語では、ロシア語で「店」を意味する магазин が同じ語源の英語 magazine では「雑誌」の意味になるというような例がある。

[36] 西江雅之（2003：17-18）は「北朝鮮の言語と韓国の言語は、互に通じないほど遠いとか、文法が異なるといった言語ではない。同じ言語であるけれども、第二次大戦後は、南の方は韓国語と言うようになり、北の方は朝鮮語と言うようになる、といったことがあるわけで、やはりその背後にあるのは、政治問題なんです。／そうなると、朝鮮語と韓国語は、単純計算の上では二言語ですね。しかしこのことも、英語で同じことを話せば、一言語になります。なぜなら、英語では、「朝鮮語」という単語と「韓国語」という単語は別のものではなく、“Korean”一つですから。そのように、何語で言語名を言うかによっても、世界の言語数は大きく変わってしまうんです。」と述べている。南北ともに朝鮮半島の言語を「1つの名称」で呼んでいるという重大な事実気付いていない。

[37] 詳細は拙稿（2012）を参照。

[38] 台湾が多言語国家であり、その多言語がスイスのように地域別に分かれているのではなく結果的に国民の多くが多言語話者であることが問題を複雑にしているが、台湾語話者が中国語による台湾語の呼称に関与するのであれば、自身が中国語話者で「も」あることを認めるべきであろう。

[39] 王甫昌（2014：30）は「[閩南語]という言葉は、国民政府が本省人の言語を「台湾語」と認めないため、「方言」という見下した区分を行うことで生み出した代用語と言える」と述べ、つづけて「それゆえ、いわゆる「閩南人」とは、ここ最近生み出されたものであり、人々が考えるほど長い歴史があるわけではない。「原住民」も同様である」としている。ただし「閩」が蔑称であるという主張はなされていない。

[40] 現在日本でもっとも広く用いられている名称は「たいわんご〔台湾語〕」であろう。「日本語」というその名称が「日本」という国名と一致する私たちにとって、国名＝言語名だと考えてしまう傾向が日本人にあるのだと筆者は考える。「かんこくご〔韓国語〕」という名称の普及も、韓国の圧力以外に、国名＝言語名という認識が作用している可能性もあろう。

筆者自身は2つの理由から、少なくとも学術的な呼称としては「びんなんご〔閩南語〕」がふさわしいと考える。1つは族群の名称として「たいわんじん〔台湾人〕」とは言えないということ、もう1つは「たいわんご〔台湾語〕」という名称は台

湾が多言語社会であるという認識を弱める可能性があることである。

[41] 同じリクツから、日本語で「にはんかい〔日本海〕」と呼ばれる海を韓国で「동해〔トンヘ：東海〕」、北朝鮮で「조선동해〔チョソンドンヘ：朝鮮東海〕」と呼ぶのは南北朝鮮の「自称」としての自由である。しかし韓国が朝鮮語を直訳した名称を他言語の話者に要求するのは「他称」に干渉しようとする誤った態度である。

[42] 漢字圏の人名の読み方（「毛沢東」を「もうたくとう」と呼ぶか「マオツォトン」のように呼ぶか）については拙稿（2018）で分析を試みた。

[43] すでに台湾国内で普及している中国語をことさらに「よその国のもの」とする姿勢にも同じ感情があるように思える。蔣為文氏によって書かれたと思われる國立成功大學台灣語文測驗中心編（2010：58）では台湾人が関わる言語を「台湾の言語」と「国民の言語」に分け、前者に台湾語、客家語、原住民族言語を、そして後者には「台湾の言語」に加え中国語、英語、日本語、ベトナム語、その他新移民の言語が含まれるものとしている。これはあまりにも実態からかけ離れた分析だといわざるをえない。筆者は台湾の中国語は「台湾華語」として（中国の中国語と別言語かどうかは別として、近藤綾（2012：xiii）では「北京における北京語と、台湾における「國語」の差異は相当大きく、筆者の感覚では、イギリス英語とアメリカ英語以上の開きがある」と述べられている）すでに台湾の土着言語として根付いていると考える。少なくとも中国語を母語とする台湾人を貶めるような言動は台湾土着言語振興運動のマイナスにしかならないと筆者は思う。

なおちょうど本稿提出締切を直前にして、大阪大学出版会の本格的な外国語教科書「世界の言語シリーズ」に『台湾華語』が加わることを知った。これは別稿で論じる必要があるほど、中国語教育研究の世界における画期的なできごとであると筆者は考える。

[44] 「中国と台湾は一つの家族」という中国の国家主席習近平氏が提唱するスローガン。

参考文献（本文中而言及したもののみ）

- 内山政春（2004）「言語名称「朝鮮語」および「韓国語」の言語学的考察」『異文化』5, 法政大学国際文化学部
- 内山政春（2008）『しくみで学ぶ初級朝鮮語』, 白水社
- 内山政春（2012）「「朝鮮」と「台湾」—その地域と名称をめぐって—」『異文化』12, 法政大学国際文化学部
- 内山政春（2018）「漢字圏の固有名詞の読み方に関する言語学的考察—人名の読み方を中心に—」『第150回例会記念 學術研究論文集』, 中國語文學會
- 内山政春（2022）『しくみで学ぶ初級朝鮮語 改訂版』, 白水社
- 王育徳（1982）『台湾語入門』, 日中出版
- 王育徳（1985a）「台湾語の記述的研究はどこまで進んだか」『明治大学教養論集』184, 明治大学教養論集刊行会
- 王育徳（1985b）「漢字のアリ地獄（上）」『台湾青年』295, 台湾独立建国聯盟日本本部
- 王育徳（1987）『台湾語音の歴史的研究』, 第一書房
- 王甫昌（2014）（訳:松葉隼, 洪郁如）『族群 現代台湾のエスニック・イマジネーション』, 東方書店
- 加藤栄（1991）「ベトナム語」『世界のことば』, 朝日新聞社
- 河野光汰（2021）「取材考記」『朝日新聞』2020年10月6日夕刊7面, 朝日新聞社
- 言語権研究会編（1999）『ことばへの権利』, 三元社
- 高永謀（2005）『台湾正名100』, 玉山社
- 國立成功大學台灣語文測驗中心編（2010）『全民台語認證導論』, 國立成功大學台灣語文測驗中心
- 近藤綾（2012）「前書き」『王育徳の台湾語講座』, 東方書店
- 蔣為文（2014）「台語不是閩南語也不是福佬語」『喙講台語・手寫台文：台語文的台灣文學講座』, 亞細亞國際傳播社
- 菅野敦志（2003）「中華文化復興運動と「方言」問題（1966～1976）—マスメディアの「方言番組制限」に至る過程を中心として—」『日本台湾学会報』5, 日本台湾学会
- 台灣基督長老教會台灣族群母語推行委員會（2011）「針對教育部使用「閩南語」指稱「台語」的聲明——呼籲請尊重「台語」不是「閩南語」的事實」台文筆會編『蔣為文抗議黃春明的真相—台灣作家ai/oi用台灣語文創作』, 亞細亞國際傳播社
- 田中克彦（1981）『ことばと国家』, 岩波書店

- 千野栄一 (1989) 「序説」『言語学大辞典 第1巻 世界言語編 (上)』, 三省堂
- 張裕宏 (2009) 『TJ 台語白話小詞典』, 亞細亞國際傳播社
- 陳麗君 (2011) 「台灣大學生的語言意識」『台語研究』 3-2, 國立台灣大學台灣語文測驗中心、亞細亞國際傳播社、華藝數位
- 南相瓊 (1994) 「NHK「ハングル講座」の成立過程にかんする研究ノート」『金沢大学教養部論集人文科学編』 32-1, 金沢大学教養部
- 西江雅之 (2003) 『「ことば」の課外授業』, 洋泉社
- 李勤岸, 洪惟仁 (2007) 「沒有名字的語言？」『台灣文學館通訊』 15, 國立台灣文學館

Wi-vun Taiffalo CHIUNG (2015) 「Taiwanese or Southern Min? On the Controversy of Ethnolinguistic Names in Taiwan」『台語研究』 7-1, 國立成功大學台灣語文測驗中心、亞細亞國際傳播社、華藝數位

『朝日新聞』

『東京新聞』